



## レントゲン検査は癌になるから嫌だ・・・ (知らない事・誤った知識の危険性)

1895年ドイツの物理学者ヴィルヘルム・レントゲンによって物体を透過する謎の光線が発見され、それをX線と名付けました。瞬く間に欧米で話題になりX線を使った娯楽を商売とする人たちが現れました。今では信じられないくらいX線に無防備だったのは、この頃まだ放射線の存在がわからなかったからです。そんなブームの中、研究者たちがその危険性を察知し始め、徐々に健康被害の原因がX線だということがわかってきました。

ちょっと寄道・・・レントゲン撮影とX線検査って何が違うのかわかりますか。

答えは・・・全く同じです。レントゲンという呼び名は、主に医療現場で使われることが多いです。

医療界に多大な貢献をされたレントゲン博士に敬意を表して当時医師たちが好んで使うようになったそうです。しかしレントゲン博士はそれが嫌だったみたいですが・・・

「レントゲン検査をすると癌になるからやりたくない」

個人の意思を尊重する今の時代、この一言で診断が停止され、治療が進まなくなることがあります。不思議なことに患者さんの殆どが60歳以上です。

「大丈夫ですよ」と安易に説明しても、逆に「嘘つき」と怒られることもあるくらいです。

ラドン温泉に有難く浸かるのも、この年代以上の人たちなんです。

原因の背景にあるのは、その時代「1960年以前生まれ」に鍵があるように感じます。

戦後日本では原爆のトラウマ、第五福竜丸事件、欧米をはじめ中国などの数百発にも及ぶ大気圏内核実験による大気中の放射能汚染など、放射線に関する嫌なことが沢山ありました。

私がか子供の頃よく言われた言葉があります。放射能に当たると、「禿げる」「奇形児」「白血病」「遺伝する」等、この頃の関東の放射線量は福島原発事故当時の大気中放射線濃度レベルに近かったそうです。そんな環境の中で生活していたのが今の60歳以上の人たちですから、放射線と聞くだけで嫌悪する気持ちも分かりますが、そこに放射線に対する多くの誤解と誤った情報が発信されたのです。

結論から言うと、病院のX線検査が原因で癌が発生するなんて99.99%ありません。逆にX線検査を拒否すれば、患者さんの健康に大きな損失となる可能性が高くなります。ちょっと知識のある方はこれにきつと反論するでしょう。ネット検索でも放射線と癌の関連性を肯定している記事は沢山ありますからね。私も一部分に関しては同意しますが、X線検査に関しては明確な証拠というものは全くありませんので否定派です。

専門家以外の方がX線と放射線と放射能、放射性物質を使い分け、ベクレルとグレイ、シーベルトを理解できる人はそう多くはありませんから誤解が生まれるのも当然ですが。

日本は世界に比べて医療被曝が飛び抜けて多い国ですが、世界の主要国の中での癌死亡率は34位、米国は27位で、癌発症率は米国6位に対し日本は30位です※。そして平均寿命もトップクラスです。なぜこんなに医療被ばくが多いのにもかかわらず、癌発症率と死亡率が低いのか、明らかにX線検査が病気の早期発見、治療に貢献しているからです。

文責 診療放射線技師 渡辺 一典

日本医学物理学会所属 医学物理士

※癌死亡率(2019),癌発症率(2012) 引用グローバルノート